

ふるさと自然の会会報

あかがし

2023年1月 vol. 317



カツオドリ（黒島女瀬漁港）2022.12.16 撮影（溝口）

目次

希少野生生物保全の難しさ・・・新しい年も心配から始まる

川内野善治

P2

県北生物誌（37）

九十九島にすむ「海の宝石」たち（3）

両角 裕希

P3-5

12月の活動報告

P5-6

事務局だより

P6

希少野生生物保全の難しさ・・・新しい年も心配から始まる

川内野善治

当会ではこれまで長崎県の助成を受け、希少種のミヤマアカネ、カミガモソウ、チゴユリの生息・生育地保全を、これに加えてR4年度からはニッポンバラタナゴ生息地保全、満場越の草原性植物回復、ヤマアカガエルの保護、希少な両生・は虫類の生息に影響を与える特定外来種アライグマの駆除を実施しており、会報にその状況を掲載している。

ミヤマアカネについては生息地で保全を実施しているが、これまでの稲作を止め休耕田として一部に水を入れ、水を入れない部分は草を生やして一定の高さに管理し、羽化後の生息地とした。この結果、昨年（339個体）より多くの個体（696個体）を羽化させることが出来たので、多くの受精卵を採取出来た。

受精卵を移植し新しい生息地となるよう吉井町のポットホール公園を考え、試験的に卵を移植していたが、水源が灌漑用水だと分かり、農家との協議が必要で十分に流水が得られず羽化個体が見られ無かった。不安定な水源でミヤマアカネの保全は出来ない所以新たな場所を探す必要に迫られた。

このようななか、「小佐々・鹿町地区地域おこし協力隊」として大阪から来ていた大越さんが世知原町に定住し（既に開作で古民家を購入）で無農薬稲作をすることになった。早速ミヤマアカネの保全地として協力をお願いしたところ快諾を頂いた。

そこで、今年は大越さんの田んぼに重点的に受精卵を移植した。ミヤマアカネ保全に関する細かいことは代掻きが始まる5月までに詰めようと思っている。

今年の秋は雨が降らず卵を移植した部分が乾燥していた。従来は田んぼは草が生えていてカラカラには乾かないので、乾燥のことは頭になかった。乾燥に気づき乾燥防止に藁をしいたのだが、卵が駄目にならなかったかと心配。

稲作が始まり、7月中旬に50～100個体の羽化を期待している。これが上手くいかなければ、振り出しに戻る（第一関門）。

予想通りに羽化してくれた場合、ここで生まれたミヤマアカネがどこで産卵するかである。新しい保全地には大越さんの田んぼ以外にも普通に農薬を使い稲作が行われているので、保全田んぼでのみで産卵をしてくれるような仕掛けが必要になる（第二関門）。

果たして、毎年同じようなサイクルで羽化～産卵までを同じ田んぼでできるか難題が多い。いずれにしても4～5年経過しないと移植の効果は現れない。このように希少野生生物の保全は簡単ではない。

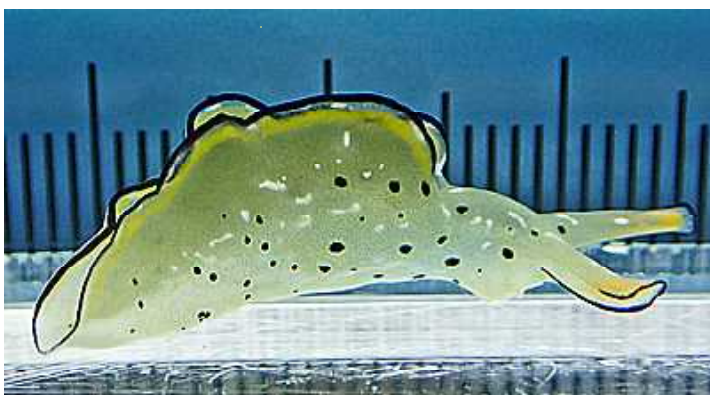
県北生物誌(37)

九十九島にすむ「海の宝石」たち (3)

九十九島水族館海きらら
クラゲ・魚類課 両角裕希

同テーマで掲載していただくのは今回で第3弾目となりますが、まず初めに「海の宝石＝ウミウシの仲間」たちについて少しだけご紹介します。ウミウシとは「貝殻を持たない（もしくは外見からは貝殻がないように見える）巻貝の仲間」のことをいいます。姿形は様々で、世界には約5,000～6,000種類ものウミウシが生息しているともいわれています。海きららでは、九十九島とその周辺海域にすむウミウシ類の調査を行っていますが、2018年から2021年の期間では約90種類のウミウシが確認されています。そこで今回は、九十九島でよく見られる1種について詳しくご紹介したいと思います。

さて、そのウミウシの名前は「コノハミドリガイ」といいます。九十九島では、水深1m～20m辺りの比較的日当たりの良い岸壁や岩場などでよく見られる印象です。体の大きさは2cm～4cmほどで、黄緑色の体には白や黒の細かい点が散らばっています。触角の先端や背中側のヒラヒラとした部分は、オレンジ色と黒色で縁取られているのが特徴です。一見すると鮮やかな色彩でとても綺麗なウミウシですが、海藻が生えた場所ではその環境に上手に紛れ込みます。隠れ上手なので、自然界で見つけるのは意外と難しいのです。



横から見たコノハミドリガイ

ところで皆さんは「光合成」というものをご存じでしょうか？植物の細胞の中にある葉緑体という器官で、光のエネルギーを利用して二酸化炭素と水から酸素と養分を作り出す反応を光合成といいます。おそらく多くの方は、陸上の植物をイメージするのはのではないかと思います。海藻の仲間も葉緑体をもっているため光合成を行いま

す。

コノハミドリガイが属している囊舌目というグループのウミウシたちは、海藻を食べて生活しています。特に、

緑藻とよばれる緑色の海藻を食べる種類が多いのが特徴です。

囊舌目の中でも、コノハミドリガイなどが属するチドリミドリガイの仲間は、緑藻の細胞の中身を吸って食べ、葉緑体だけを消化せずに体の中に蓄えます。

そして、体内に蓄えた葉緑体に



自然下での隠れ上手な姿

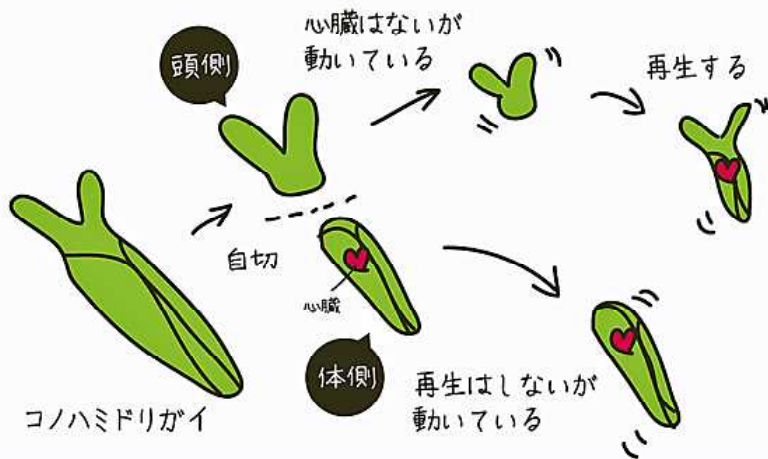
エネルギーを利用して生活しています。本来私たち人間を含む動物たちは、食べ物を食べることでエネルギーを得ています。しかし、このチドリミドリガイの仲間たちは、海藻を食べて葉緑体を蓄えることで、植物と同じように光合成をしてエネルギーを得ることができるようになります。そのため、光さえあれば、数週間から数か月もの間何も食べずに生き続けることができるのです。

コノハミドリガイのすごい能力は、それだけではありません。2021年の3月頃、奈良女子大学の研究で発見されたとニュースなどで少し話題になっていたのも、もしかしたらご存じの方もいるかもしれません。大規模な自切と再生を行うことが分かったというものです。自切する生きもので良く知られているのは、トカゲの仲間ではないでしょうか。敵に襲われ身の危険を感じた際に、尾の先端を自ら切り落とすことで逃げ延びます。種類にもよりますが、自切した後の尾は再生します。

同じように、コノハミドリガイも自切と再生をするというのですが、トカゲなどの今まで自切をすることで知られていた動物たちとは少し異なります。頭の部分と心臓がある体の部分が切り離されても、生きていくというのです。他の自切をする動物たちは、そんなことをしてしまえばもちろん死んでしまいます。このニュースを見たとき、私はとても驚きました。九十九島でよく見られる種類のウミウシですが、そんな特殊な生態を持っているだなんて思いもしなかったのです。

研究チームの報告によると、頭と体が切り離された個体は、頭の部分は自由に動き回ってエサを食べ、1週間ほどで心臓を含む体の部分の再生を始めたそうです。体

の部分は、刺激などを受ると動き周り、心臓も動き続けていたものの、頭の部分を再生することはなかったようです。複雑な構造を持つ動物の中で、心臓などの大部分を失っても生き続け、さらには再生もするという点での報告



コノハミドリガイ自切と再生イメージ

はほぼ初めてのものだといいます。

指1本分にも満たないほどとても小さな体をしていますが、特殊な生態をいくつも持っている謎に包まれた生きもの。それが、コノハミドリガイです。ウミウシの仲間たちは、数多くの種類がいます。外見の特徴はもちろん、すんでいる環境や食べるエサ、その他の生態も多種多様です。ぜひ海に行ってウミウシに出会えたら、じっくり観察してみてください。今回ご紹介したコノハミドリガイのように、まだまだ知られていない不思議な生態を発見することができるかもしれません。

12月の活動報告

●緑といきもの賑わい事業関係

・アライグマ駆除

(11月) 10日：オス1、11日：メス1、18日：オス1、24日：オス1、26日：オス1、30日：オス1、

(12月) 3日：オス1、4日：オス1、8日：オス1、メス1、11日：オス1、15日：オス1、17日：オス1 (計) 13頭

●ニッポンバラタナゴ保全

12月9日 生息地の水位確認(写真撮影:根本)
昨年同様水位が低く、下流の水がある部分の
底土は強い還元土壌となっており、これまでの
調査で産卵母貝は採取出来なかった。
生息は難しいと考えられる。



生息地の状況

●会報の封筒入れ

12月7日 会報316号(川内野・大谷・上田・宮下)

事務局便り

●佐世保市レッドリスト改訂

12月2日 入稿完了

●受理文書・刊行物く委員会及び発送作業にて回覧

12月 5日 くれよん2022年度 第5号(市社会福祉協議会)
12月10日 第2回ボランティア実践講座開催案内(市社会福祉協議会)
12月20日 会報vol.305 寄贈のお礼(市立図書館)
12月22日 一般社団法人CEPジャパン 解散のご挨拶

●会報発送

日時: 2月7日(火) 19:00~20:00 場所: 清水地区公民館1階第一講座室

あかがしVol.317自然通信

発行日/2023年1月10日

発行者/川内野 善治

発行所/ふるさと自然の会

事務局/〒859-6405 佐世保市世知原町開作427-5

川内野善治 方 TEL/FAX 0956-78-2865

<http://www.5d.biglobe.ne.jp/~furusato/>

